

第58回車座集会意見交換内容（宮前区）

- 1 開催日時 令和5年4月23日（日） 午後1時00分から午後3時07分まで
- 2 場 所 宮前区役所向丘出張所
- 3 参加者等 参加者17名、傍聴者等18名 合計35名

<開会>

司会：定刻となりましたので、ただいまから第58回車座集会を始めさせていただきます。

私は、本日の司会を務めさせていただきます宮前区役所企画課長の小出と申します。どうぞよろしくお願いたします。

本日の車座集会は、「公共施設をもっと地域のために使いやすく！」と題して、区役所市民広場と向丘出張所の活用検討を通じた「公共施設の地域化」の推進について、福田市長と参加者の皆様で意見交換を行っていただきます。

それでは、本日、ご参加いただいている皆様を紹介させていただきます。お名前をお呼びいたしますので、手を挙げていただきますようお願いいたします。

初めに、区役所市民広場の活用にご協力いただいている方々からご紹介いたします。

宮前区まちづくり協議会理事長であり、宮前区ソーシャルデザインセンター、略してSDCの立ち上げにも関わっていただいている藪本さん。

同じく宮前区まちづくり協議会委員であり、SDCの立ち上げにも関わっていただいている秋岡さん。

まちづくり協議会委員・宮前ガーデニング倶楽部などで活動をされている細谷さん。

mama-on！事務局で活動されている阿久津さん。同じく小泉さん。

TIDA's house管理者・SUNFESTA主催者であり、SDCの立ち上げにも関わっていただいている小川さん。

宮前まち倶楽部代表の辻さん。

宮前ガーデニング倶楽部などで活動されている山崎さん。

次に、向丘出張所の活用にご協力いただいている方々をご紹介いたします。

向丘地区連合自治会会長であります石川さん。

向丘地区連合自治会副会長であり、交流スペース・むかおかフェ実行委員会の代表でもある川田さん。

交流スペース・むかおかフェ実行委員会の委員であります吉永さん。同じく中里さん。

元教諭で「むかおアート展」の出展作家の砂田さん。

オナリナぼっぼ代表の田邊さん。

アトリエ言の葉、副理事長の大高さん。

子育てサロン「ひよっこ向丘」代表の猪股さん。

フレンド神木地域包括支援センター、センター長の小林さん。

以上となります。本日はよろしくお願いたします。

続きまして、行政からの出席者を紹介いたします。

福田紀彦川崎市長でございます。

南昭子宮前区長でございます。

それでは、開会に当たりまして、福田市長からご挨拶申し上げます。福田市長、よろしくお願いた

します。

<市長挨拶>

市長：改めまして、こんにちは。第58回目の車座集會に多くの皆さんにご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

コロナが大分収束してきたということで、この数か月、いろいろなところで車座集會も復活してきて、ようやくフェースツーフェースでこういう議論ができるというので、うれしくてわくわくしてという感じですが、今日のテーマ、これからの時代に誠にふさわしいテーマだと思っていて、7区の中でも先駆けて南区長のところで皆さんと一緒にチャレンジしていただいている、この公共施設の地域化という、何か不思議な言葉だと思うんですけど、公共施設はもともと地域のものだと思うのですが、それをあえて地域化していこう、もう1歩踏み込んでいこうというチャレンジについて、みんなでどういうルールづくりができるかを議論していくのは、これは川崎市内だけじゃなくて、実は全国に、この共通した課題があると思うんですけど、それを多分1歩前進させていく、すごくいいチャレンジングな仕組だと思っています。

宮前区というのは皆さんが住まれている、私も住民の1人でありましてけれども、とにかく市民活動が盛んだし、意識の高い方がものすごく多いという意味では、チャレンジしていくには最もふさわしい、7区の中で先陣を切っていただくにはふさわしいところだと思っています。ぜひ、こうした議論と取組が川崎市内に横展開されて、また全国に展開できるような、そんな前向きな議論ができればいいと思っています。今日はどうぞよろしくお願ひいたします。

司会：福田市長、ありがとうございました。

本日の開催趣旨について、ご説明申し上げます。

市民グループの活動やイベントの開催のための場所の確保等については、日頃、区民の皆様から多くのご要望・ご意見をいただいております、公共施設のさらなる利活用は、関心の高いテーマとなっています。

公共施設の利活用には、公共性・公平性・信頼性などを担保しながら行政が施設の使用を許可する必要がありますが、その許可は行政の裁量によることも多く、その基準が明確になっていない部分もあるため、なかなか有効活用が進んでいない状況となっています。

こうしたことから、本日ご参加いただいている皆様からご意見をいただき、行政と地域が連携・役割分担しながら、公共施設をもっと地域のために使いやすくする枠組みの検討につなげていくことを目的に開催いたします。

続きまして「公共施設の地域化に向けた課題の共有」について、企画課の滋野から簡単にご説明申し上げます。

滋野職員：宮前区役所企画課の滋野と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

今日のテーマは「公共施設をもっと地域のために使いやすく！」です。

まず、スライドの3をご覧ください。

公共施設の地域化の推進ということで、公共施設の地域化というのは、そもそも何ですかというところがあると思うのですが、公共施設について、より自由度の高い活用に向けた地域での利用ルールの決定や、その管理・運用への参加を促進すること。なかなか難しいというところがあると思うのですが、冒頭で福田市長もおっしゃいましたように、要は、公共施設を地域の方々にもっといっぱい使ってもらいましょうという取組になっています。

右の画像をご覧ください。公園で音楽フェスとか、道路でマルシェ・オープンカフェとか、公共施設

で子ども食堂とか、このような形で、いわゆる「まちのひろば」というのをどんどん創出して行って、川崎市でより地域の方々が活発にコミュニティを推進していただければというところで、こういった公共施設の地域化を進めていくというところになっております。

スライド4をご覧ください。

そうは言うものの、実は行政にもいろいろと事情というのがありまして、それが課題イコール職員我々の悩みなんですけれども、主に3点ございます。

それが何かというと、(1) 基準に沿って施設を運用する必要があるということ。(2) 場所ごとに考える必要があるということ。(3) 公共性・公平性・信頼性の判断が難しいということ、になっていきます。それぞれの課題について共有させていただければと思います。

スライド5をご覧ください。

まず(1)です、基準に沿って施設を運用する必要があるというのがどのようなことかということ、施設の種類ごとに異なる管理基準というのがございます。一言に公共施設といっても、一番右のところ、公用財産というものと、それから公共用財産という2つのものがございます。

これは何かというと、まず、公用財産というのが「市が事務又は事業を執行するために直接使用するもの」、例えば市役所の庁舎であるとか、それから消防署がこれに当たります。

公共用財産というのが「市民が共同利用するもの」ということで、ふだん皆さんが使われている公園とか、道路、河川、学校、図書館など、このようなものが当たります。

続きまして、スライド6をご覧ください。

何が問題なのかということ、施設の種類ごとに管理基準が異なるというところがございます。例えば、私が公共施設で物を売りたいと思ったときに、例えば庁舎で物を売ろうとすると、川崎市庁舎管理要綱というものがございまして、そちらにのっとって販売をするところで、スライド一番下、庁舎管理は次のいずれかに該当とすると認める場合は、規則第11条第1項の許可をしないものとする。営利を目的とした不特定多数への無秩序な物品の販売、商品等の紹介、勧誘等。庁舎で販売をするときは、営利を目的としてはいけないというのが、ここで分かります。

続きまして、公園で同じような物品を販売しようと思ったときに、川崎市都市公園条例というものがあるんですけれども、都市公園において、次に掲げる行為をしようとする者は、市長の許可を受けなければならない。(1) 行商、募金その他これらに類する行為をすることということで、ここには営利という言葉は出てこないんです。なので、公園で販売をしようとするときには、営利というのは、特にそこでは言及されていないというのが分かります。

続きまして、スライド7をご覧ください。

よく市民の方々から、そもそも営利と非営利の差は何ですかという話はあると思っています。これも実に判断が難しく、非常に複合的な材料が絡んでくるんです。例えば、物を売っていたり、参加費を取っていたりするからといって、単純に営利というわけではないのかとか、材料費程度ならいいのかとか、非営利団体がやっているのならいいのかとか、事業の目的自体に公共性があればいいのかとか、このようにいろいろな要素が複合して判断が非常に難しく、我々職員も1個1個、個別具体的に判断をしていかなければいけないというところが非常に業務を行う上で難しいところになってきます。

続きまして(2)スライド8をご覧ください。

場所ごとに考える必要があるということで、同じ学校でも普通教室と特別教室のセキュリティが分かれていて、例えばほかの人がどこかに入ってしまうとか、個人情報を取っているところに入ってしまうとか、そういったことがなくて、ちゃんと安全面が保たれているというところであれば、地域の方々に貸しやすい、動線的にもそこには入らずにちゃんとできるというところがあるんですけれども、同じような学校という言葉を一括りにしても様々な立地条件であったり、施設の違いであったりがあるので、

その全ての施設ごとに市がルールをつくってしまうと、ものすごく労力や時間が必要になってしまう。

また、さらに一般化したルールをつくると、逆に皆さんが使いづらくなってしまいうところがありまして、そこはやはり1つにまとめてやるのではなくて、1個1個考えていかななくてはならないというのが非常に行政としても難しいところになってきます。

続きまして、スライド9をご覧ください。

公共性・公平性・信頼性の判断が難しいということで、例えばイベントをやりたいと思っても、子どもたちも楽しめそうだし、親御さんの居場所にもなると思うけど、物を売っていいのかとか、町内会・自治会の方だったら信頼できるけど、この団体にはどうなのだろうかとか、ほかの団体からも貸してと言われたらどうすればいいのかとか、そういった公平性というのがなかなか判断が難しい。また音の問題、何か事件とか事故があって責任が問われるというときに、音がうるさいとか、ボール遊びは危ないとか、人がたくさんいて歩きにくいとか、いろいろな苦情というのが行政的には想定されます。

こうしたご意見はもつともでありまして、どのような形で皆さんと一緒に考えていけるのかを検討していかなくてはならないとなってきます。それが今、挙げた課題の3つになってきます。

スライド10をご覧ください。

公共施設の地域化を進めていくためには、皆が互いに理解を深めながら、事例を積み重ねることが必要ということで、これがまさに今回車座集会のテーマで、皆が互いに理解を深める、行政と地域の方々がいろいろなケースを考えながら、事例を積み重ねることが必要ということで、まさにこの議論の場というのが設けられたところでございます。

最後に、スライド11です。公共施設の活用可能性について、これまでの取組の経過をご説明させていただきます。

今回、主に区役所市民広場と、それから向丘出張所、2つをテーマにお話をさせていただいております。区役所市民広場は、令和4年12月の地域デザイン会議で、まさに公共施設の地域化ということテーマに、活用、アイデアワークショップを行わせていただきました。その後、2回ほど活用に向けた検討ということで、活用検討委員会が発足しました。その後、令和5年3月に2回お試し活用イベントの実施ということで、イベントの主権者の方には、後で事例発表していただきますけれども、お試し活用イベントを踏まえた今後の進め方の検討をしたということになっております。これももちろん今現在、取組の真っ最中で、今後も活用の方向性を考えていかなければいけないところがございます。

向丘出張所に関しては、令和2年8月に、市民の交流の場としてのむかおかフェがスタートしました。令和4年2月に宮前区役所向丘出張所の今後の活用に関する方針を出させていただいて、むかお暦がスタート、令和5年3月に木質化、まさにここの空間の、木質の工事が完了したというところなんです。

なので、今日は皆さんとはまさに地域と行政で、どれだけの責任分担で、どれだけの関係性でやっていけば、その公共施設の地域化というのが進むのかというところを議論していただければと思っております。私からの説明は以上になります。

司会：ありがとうございました。

続きまして、公共施設の活用の可能性について、実際に公共施設を活用いただいた2つの事例をご紹介します。

1つ目は、宮前区の総合庁舎と宮前市民館、図書館の間にある区役所市民広場を活用して、m a m a プリマ&m a m a - o n ! カレッジやひろばマルシェを行った事例。

2つ目は、向丘出張所において、地域のつながりと顔の見える関係づくりを促進していくことを目的としたむかおかフェやむかお暦、そして本日開催されている向丘つながるサンデーの取組事例をそれぞれご紹介いたします。

それでは、初めに区役所市民広場の活用事例について、小泉さん、小川さん、藪本さん、それぞれ順番に発表をお願いいたします。

小泉さん：では、私のほうから、m a m a フリマ&m a m a - o n ! カレッジの開催について、ご報告をさせていただきますと思います。私、m a m a - o n ! 事務局の小泉と申します。改めましてよろしくお願い申し上げます。

今回、ご報告させていただくのは、2023年3月14日に行った第1回m a m a フリマ&m a m a - o n ! カレッジについてです。主催は私たち、m a m a - o n ! 事務局で行いました。

やった内容としては、主に子育てグッズをフリマで販売していただくものと、あと子育てに役立つ講座というものをm a m a - o n ! メンバーが今回、このときは色彩心理というものを使って、子どもとのコミュニケーションを深めるというものと、離乳食教室のプチ講座をお話させていただきました。あとは、ブースでママ作家たちの手作り品の販売という、大きく分けて3つのものをさせていただきました。

m a m a - o n ! というのは何かということで、初めてお聞きになった方もいらっしゃると思うので、簡単にご説明させていただきますと、宮前区、高津区在住で、この地域で活動しているママのグループになっています。デザイナーですとか、カメラマン、カラーセラピスト、ハンドメイド作家など、個人で活動しているママたちがメンバーとなっています。

そして、小さい子がいて遠くに行くのが大変でも、地元でいろいろなことをしている人がいるんだとか、地元で楽しめることがあるという、地域の情報というのを年1回発行のフリーペーパーを通してお伝えしています。また、フリーペーパーのほかに、webでも情報を発信しております。

こここのところ、やっとリアルなイベントが対面でできるようになってきたので、活動して7年目になるんですが、イベントなどを通じて地域で活動しているママと楽しいことを探しているママをつなげる活動しております。

写真の上のほうは先日の宮崎台ふる里さくら祭りで、出展したメンバーの写真となっております。

下のほうのm a m a - o n ! と書いてあるのが、年1回発行している冊子となっております。今日、持ってきているので、もしご興味がある方がいらっしゃいましたら、お声がけいただければありがたいと思います。

そして、今回開催したm a m a フリマとm a m a - o n ! カレッジの開催目的となっております。ふだん私たちメンバーはそれぞれ資格を持って活動しているので、イベントでワークショップとか、販売をしていることが多いのですが、今回、フリマにした理由としては、資格とか特技がなくても、何かやりたい、楽しみたいと思っているママが、最初の1歩として、何かできるものを応援したい、気軽に参加していただけるイベントとして、フリーマーケットを開催しようと思いました。ですので、地域のママたちの新たなコミュニティの場にしたいと思ってフリマを企画しました。

そして、もう1つ、カレッジのほうでは、m a m a - o n ! メンバーから子育てに役立つ情報を30分程度のプチ講座としてお伝えすることで、子育ての悩みを解決したり、もしくは少し心が軽くなってもらったりということで、ママたちを応援できるのではないかと考えて企画いたしました。

やはりママたち、宮前区は通勤族の方も多かったりするので、ちょっとしたお悩みが積み重なっちゃうと苦しくなったりするかなと思うので、そういうところでほかのママの話の話を聞いたり、先輩ママの話を聞くことで心が軽くなってくれたらと思っております。

そして、今回イベントをしてみてわかった公共施設の可能性、よかったこととしては、広場が広いので、人が集まっても窮屈に感じないというところです。まだちょっと密とか気になるかもしれないですけども、そういったところでも広いスペースは安心だと思いました。そして、区役所というところな

ので、区民なら一度は来たことがあるわかりやすい場所ということで、ご案内がしやすいと思っております。また、区役所とか図書館に用事があってきた方が気軽に立ち寄れる、ついでに立ち寄れるというところで、すごくいいのかなと思いました。

実際、来場者のお声として、せっかく広いスペースがあるのに使わないのはもったいないと思っていたとか、もっとイベントをしてほしいというお声もいただきました。あとは数件、私も出店したいけど、どうしたらいいですかというようなご質問があったので、ママたちの何かやりたいという気持ちにスイッチを押せたと思っております。こういった活動を通じて地域の活性化や区民の交流、ママの一步の応援につながることでいいなと思っております。

活用する上で難しかったことということで、課題と対策として、私たちが考えたことをお伝えさせていただきます。

まず、準備というところでは、テーブル、椅子、テントなど、こういったものを今回は区役所からお借りしたんですけれども、区役所からお借りできないとなるとレンタル費用がかかるので、今後は何か用意しておくとか、どこか場所を借りるとか、そういったことができるのか、対策が必要かと思っております。

あとは、天候に左右される。屋外なので、暑さ、寒さとか、雨天の場合の開催が難しいということなので、季節ごと、天候というところで対策が必要かと思っております。

また、開催日の設定というところでも難しく感じていて、広場はホールで発表会等で使うときには集場所になっていたりすることが多いので、そういったところでちょっと混みあったりしないかという兼ね合いが難しいと思うので、事前にホールの利用も確認しておくことが必要かと思っております。

また、告知の方法というのなかなか簡単ではないと思うところがあって、SNS、チラシ、webなどで、区民にどう知っていただくか、ママたちにどういうふうに届けるかというところが課題かと思っていて、区役所で配布させていただけないかとか、ほかのイベントでのチラシも配布できないかというところで、対策させていただければと思います。

あとは会場レイアウトということで、点字ブロックとか、植木、ベンチなどがあり工夫が必要なので、ちょっと出店が多い場合はもう少し区役所とか、市民館側に配置をするなど、いろいろと動線を確保しながらレイアウトをする必要があると考えています。

今後の活用の可能性として、6月3日にまた同じように第2回のmamaフリ、mama-on!カレッジを開催予定ですので、ぜひお時間がありましたら、足をお運びいただけたらうれしいです。

そして、やりたいこととして、7月28日の金曜日、子どもキャンドルナイトというものをやれたらいいなと思っております。子どもたちも夏休みになると思うので、ちょっと暗くなってきて、いつもと違う雰囲気を楽しんで、非日常な感じも夏休みの特別感と一緒にお届けできたらいいと考えております。

mama-on!事務局としては、今後もママたちがハッピーな気持ちになれるように、地域のママたちのコミュニティの場として広場を活用して、いろいろと企画していきたいと思っております。

小川さん：皆さん、こんにちは。野川に住んでいます小川淳と申します。ふだんは野川のほうでイベントなどを開催してまして、宮前区は46年住んでいるので、思い切り地元です。

市民広場は、私が中学生のときに、好きな男の子を呼び出したバレンタインデーの思い出などがありますので、とても思いのある広場として、今回、そこでイベントを開催できるということで、地域デザイン会議で実行委員会を立ち上げてまして、ひろばマルシェというものを開催しました。

mama-on!さんがやった数日後の3月16日に10時から3時でイベントを開催しました。どんなイベントだったかというところ、カフェ部門とマルシェ部門の2つを作りまして、カフェ部門ではコーヒーを出したり、あと町散歩、スマホ相談、ボードゲームやライブラリーやダイアログなどがありました。

マルシェではハンドメイド作家さんや似顔絵、あとは福島の特産品などを販売しました。今回ひろばマルシェを開催でき、地域のそういう場所を使えたというのは、出店者の皆さんにもすごく画期的なことだから、これはいいチャンスだよみたいな話をしていたんですけども、当日は平日だったので、ちょっと集客のほうは心配されたんですけども、たまたま1歳児健診の日だったので、子どもたちと親子さんが来たりとか、あとは告知も役所にチラシなども置いていただけたので、それを手に取ってきてくれた方も結構いらっやっしたと思います。なので、ハンドメイド作家さんたちがどれぐらい販売できたかというのはちょっと分からないんですけども、皆さんは楽しんでできたということで、成功したということで多分いいと思います。

やってみてよかったことは、先ほどmama-on!さんもおっしゃっていたんですけども、広い場所なので、やりようによってはいろんなことができるということが分かりました。今回もブースとしては結構多かったんですけども、それなりに皆さん、間を開けながらブースを置くことができたので、とても広くてよかったと思います。

あとは公共の場所ですので、信用があるということで、何か怪しまれないでイベントが開催できるというのは、大いにあったと思います。あとチラシとかも置いてもらったので、信用があるというのは、すごく大事なことだと思いました。

あと、やっぱり難しいこともありまして、mama-on!さんがおっしゃっていたように、1番大変なのは備品ですね。テーブルとか、あと3月だったので、ちょっと油断していたんですけども、やっぱり太陽がすごく暑くて照り返しもあったので、テントとかタープなしではぼやっしたんですけども、完全にやられちゃいました。テーブル、椅子と、あと暑さですね。暑さがすごく本当に大変だったので、6月にまたサンフェスタというイベントをやらせてもらうんですけども、今、その準備を進めていまして、そのタープの準備と、あとは暑さ対策などが今、困っているところで何とかしようと思っているところです。

でも全体的には、本当にあの場所で市民がイベントをできたということはすごく画期的なこと、あの場所でイベントに限らず、いろいろなことができるようになれば、宮前区がもっと笑顔あふれるまちになるのではないかと私は個人的には思っています。ありがとうございます。

藪本さん：3月16日、私はここにある「あなたの物語を話そう」という1本の旗を立てました。今、こんなところに私は立っておりますが、恐らく宮前区でまちづくりに関わった年齢については、最も若いかもしれません。実は東日本大震災が起こったときに、東北大学で応用の科学分野の企画制作という仕事をしておりまして、今日のようなこういった対面対話の場がいかに脳を活性化するか、そのことを思う存分知らされました。それで、そんなわけで宮前区に来てみたら、今、市長がおっしゃったように、宮前区には本当にたくさんのまちづくりに関わる方がいて、この間、他界された松井隆一さんもそうですが、私はついそこに引き込まれてしまっていて、今日、今、ここに立っているというわけです。

物語というふうにしたのは、一時、私が新聞紙面などに人の話を聞いて書くということをしていたので、あえて、あなたの話を聞かせてじゃなくて、あなたの物語を話そうというふうにしました。

先日コミュニティチャンネルで取材されたときに、これからはやっぱり行政と市民が対話をしながら、こんなふう新しい関係性をつくっていくことが一番大事なのではないか、そんなふうに思いました。

実はですね、このAnticipation Dialogueという、今、画面に現れていますが、昨日も実はフィンランドと結んでこの2人の講師と対話、ダイアログの研修をしていたのですが、この中のとても特筆すべきは、今、こんな時代に未来を思い出す、未来から現在を振り返るというような手法がフィンランドの保健衛生局などで開発されまして、私たちが今、その恩恵を受けている。

ちょっと小さく書きましたが、当時、大学で初めてこの研修を受けたときには、対話は対等な関係

性の中に成り立つと。日本では難しいのではないかと私はひそかに感じました。でも、今、この場に来て、これは可能性があるというふうに思い始めています。

まちづくり協議会というのは中間支援組織でもありましたので、様々な試みもしてきました。そんな中で、コロナ災禍に行ったのが「みやまえ未来語り」のリレートーク、今日ここにいらっしゃる辻さんなんかも巻き込んで、まちづくり関係の方を巻き込んで市民を視聴覚室から地域をZOOMでつなぐという、まだZOOMに慣れない頃に行ってみました。未来語りが人と人をつなぐ1つの事例です。

それから、今日、ここにいらっしゃる石川さんなども来ていただきました、宮前区の医師、歯科医師、それから町内会・自治会、学校関係者、NPO代表者、ジャーナリスト、タウンニュースの編集長なども巻き込んで、皆さんに向けて行った未来語りのダイアログです。本当の未来語りはもっと長く3時間ぐらいかかるんですが、ここではエッセンスを行ってきました。このときに、私と一緒に未来語りを学んだ国際医療福祉大学大学院の教授である友人がいるのですが、今回広場で一緒に「あなたの物語を話そう」、私と一緒に聞き役になってもらいました。

これは、これこそ言わなくちゃいけないんですが、宮前発で初めてウクライナの4人家族との対話、「つなぐ むすぶ とどける」イベントを行ったときのものです。ソロツカさんというアーティストが宮前区に住んでいらっしゃるのですが、その4人家族の1人、お嬢さんがぜひ宮前の方たちに話したい、そう言って最初は市民館のギャラリーを訪ねていらっしゃいました。ところが市民館のギャラリーは、まだこのときはウクライナというのは非常に遠かったんです、去年の5月ですが。

です、どうしたらいいか分からないということで、私たちのもとにいらっしゃって、そして最初は困難が付きまといました。市民館で募金活動してはいけないとか、あとはウクライナと反対する、このときはですね、中野さんというベラルーシに留学していた若い青年も巻き込んで行ったので、何か政治的な対立になってしまったら困ると。です、このときもダイアログと一緒に学んだ、そういった仲間たちが9人も集まって、万が一、政治的な話になってしまったらどんなふうを持っていこうかといった討議を繰り返して、この日に至りました。

ここに至ったことはとても感謝、感激しているのですが、やはり箱物だけ用意すればいいのかという、この間あるセミナーにもありましたけれども、やっぱり箱物だけは駄目で、このときは行政の新任の課長が手を差し伸べてくださりまして、市民館と橋渡しをしてくれて、大会議室で開催できました。130人の方が集まって、皆さんの戦争体験等々を話されていました。

そして、一昨年のある朝、山形県の町役場で55年前の宮前の貴重な写真が見つかったというニュースを知るんですね。それで、問い合わせて調べましたら、1960年代当時、東京オリンピックの頃に20代でこの田園都市の開発に携わった方が、一眼レフで撮りためていた写真を映画化したと。NHKの元アナウンサーなども関わって、当時のナレーションをつないで1本の映画ができた。じゃあ、誰とこの山形の本木さんを対話させようかということで選んだのが、宮前区出身の、宮前区に住んでいた東北でコミュニティーデザインを学んでいる20代の青年、同い年の22歳の青年でした。この2人のダイアログを行いました。

そして、このときには宮前在住の作家の小倉美恵子さんも参加してくださって、大いに盛り上がったのですが、このとき、私が忘れられない言葉は、この22歳、宮前を出ていった青年が「僕たちはふるさと難民なんじゃないか、藪本さん」ということを言いました。

このときに毎日新聞が取材してくれまして、そのずっと後になるんですが、その後、山形からサツマイモの苗が約800から1,000も宮前の小学生に食べさせたいと届きまして、そして、交流が始まりました。このときに送られた苗を、宮前の農園4か所に配って、まちづくり協議会の農あるまちづくり部会という方たちの協力の下、宮前の土で温められ、そして収穫された芋が市民館に運ばれ、男たちの料理教室で焼き芋に焼き上げられまして、それで当日、昨年11月26日なんですが、市民広場は本

当につながぐ、むすぶ、ひろげる温かい市場になりました。

このときは有志の方が山形と宮前を結ぶ「紅ほっこ」という、そういったシールまで作ってくださって、パンに加工したり、野菜として並べられたり、焼き芋として並べて、本当に心温まる交流の場になりました。1つの事例として記憶しておいてください、ぜひ。

つながりをこういった処方箋にして、ともに未来に語るには何が今、必要なのか。本当にこの時代、考えさせられます。

3月16日、この日は、まさに未来語りとはちょっと違ったもっとカジュアルな対話の会だったのですが、最近感じる宮前の魅力は、それから宮前で生きてきて思うことというのは、午前中にあの辺りを歩いていらっしゃるのは80代の高齢の男性が多いんですね。散歩して歩いている方が次々と関わっていらっしゃって、最後は5人そろいました。

そんな中で、今、宮前で生きてきて思うことを皆さんが宮前の地の気、天の気を感じながらピアノを聴きながらダイアログをしました。

今、年を重ねるのが楽しくなるまちとは、地域とは、これは私たちの人生を生かして、つながりを処方箋として、真の役割、出番、居場所のある地域を、それこそまちのひろばをつくることじゃないかと感じています。

他者に対する想像力のある成熟したまちのために、これからここ車座で始まる後半のために、ぜひ書いておきたいのですが、対話は対等な関係性の中でのみ成り立つと。ぜひ、よろしく願います。楽しみにしています。

司会：発表、ありがとうございました。

続きまして、「向丘出張所」の活用事例について発表をお願いいたします。

吉永さん：吉永でございます。

今、ここに立っているのは、元宮前区長の野本紀子さん、そして私にとって、すごいスーパー公務員さんがいらして、その方があって出張所とつながっています。出張所とつながって、このつながる、もっともっと太いつながりなのですが、実は、去年、川崎市で花と緑のコンテストというのが開かれていて、その表彰式のときに、福田市長が壇上で私にガッツポーズしてくれたんですね。私も「やりました」とガッツポーズをして、そんなことがあって、それでこちらの所長が花を持って来てくれたんですね。もう完全に私は出張所と太いつながりができたかと思っております。

むかおカフェは2020年8月に、当時、向丘地区連合自治会の新事業で始まりました。交流スペース・むかおカフェとしてスタートして、誰もが自由に集まって、触れ合って、つながれる、地域を活性化していく、そしてカフェには気軽に相談できる、例えば出張所の窓口では相談できないようなこともスペシャリストを招いて、月1回、コロナ禍だったのですが始まりまして、現在に至っています。

2時間の内容なんですけれども、ひきたてのコーヒーとお茶、焼き菓子があって、おしゃべりをして、あとワークショップや、オカリナぼっぽさんのような演奏があったりと、盛りだくさんです。

もう1つ、ひよっこ向丘は0歳から2歳児の親子が参加する子育てサロンです。特に地域の男性の方に来ていただいて、紙芝居や絵本の読み聞かせ、先日はバルーン講師などの体験もあってよかったです。ここの施設はママの友達づくりのスペース、ここにきている方は子供に癒され、ママには刺激をもらっています。むかおカフェのミーティングでは、多世代の方たちと地元文化を紹介したいという話になり、だったら、むかお暦、ひよっこ向丘のことも紹介しましょうとなり、そちらにあるベンチはリノベーションになっていて東泉寺さんの倒木で作られています。東泉寺さんは戦国時代に葛山平さんによって開基されたそうです。葛山平さんはそこから200M位のところに家があったそうです。そういうことも

あって、諸説ありますが、ここが葛山平さんの名から平になったそうです。

ひなかざりは今年4日間だったのですが、226名の方にいらしていただきました。今年のお雛様の中に100年前のお雛様があったんですね。アンケートでは皆さんに、100年前のお雛様があってもよかったという感想をいただいています。

面白いエピソードの1つは、お雛様がお家にいつまでもあってどうしようという方もいらして、欲しいという方もいらして、この場所からお雛様自体が嫁入りをしたという例もありました。5月に端午の節句、7月には短冊をして小学生とか帰りにちょっと寄ってもらおうというようなスペースになって、9月には十五夜のお月見飾り、10月は地域の方々のアート展、クリスマスツリーを設置して、年間を通して暦を行っています。

その暦の中に、今年は1月に行われたのですが、おと日和こんさーと、お琴、三味線、尺八、和楽器のコンサートがツクルブメンバーの方たちのディスプレイの中で、開催されました。募集人員よりとてもオーバーになりまして、うれしい悲鳴でした。

この公共施設、可能性、よかったこと。その中には、出張所ではなかなか相談できないこと、例えば相続、それから終活や認知症とか、そういうスペシャリストの方にいらしていただいて、もちろん無料で相談に乗っていただいています。

その相談をされた方のお声を聞くと、やっぱり公共施設というか、そういう庁舎で相談をやっていることなので、とても安心して相談できる、ほかの企業とか、そういうところではなくて相談に乗ってくれるので、すごく安心だということでお声をいただいています。私たち川田実行委員長をはじめ、スタッフ全員フレンドリーなので、お気軽にいらしてくださいという形で、月1回、実施しております。

活用する上でちょっと難しかったことは、やはりコロナ禍ですね。コロナ禍での実施の有無に関して考えること、庁舎で飲物を提供してよいのかというようなところもありました。

最後ですが、この木質化を踏まえて今後の活用の可能性ですが、これは個人的なものになってしまうのですが、ここで打合せをしたり、ものづくり、小物を作ったり、今日もボランティアさんで高校生かな、大学生かな、いらしているそうですので、せっかく来てくれたその方たちともつながって、例えば小学生がちょっと分からないことがあって、ここに来たらお兄ちゃんたち、お姉ちゃんたちがいて、教えてくれるというようなスペースにもなったらいいと個人的に考えます。

それと、私自身ですね、そこの縁側で絵本の読み聞かせをボランティアさんたちと一緒にやっていけたらと思っています。将来的には、この絵本の読み聞かせを公園でやりたいと辻麻里子ちゃんの協力を得て、頑張ろうかなと思っています。

もう1つだけ。外の花壇、今日、市長にも植えていただいたんですけれども、そこはみんなの花壇として私たちのスペースになりました。なので、そこで皆さんとまた集まる機会もあると思います。

最後に、私の母の座右の銘なんですが、「撒かぬ種は生えぬ」と言っておりました。ですから、私もそのまま引き継いでいこうかなと思って、ここ向丘出張所で活動したいこと。いろいろな種まきをして、実りある向丘出張所にしましょうという願いと、小松崎所長と月1回、もう本当に垣根なく本音で言い合い、お話ができる車座集会を希望します。市長、お願いします。所長もお願いします。以上でございます。

<意見交換①>

司会：発表ありがとうございました。

それではここからは、発表いただいた公共施設の活用事例を踏まえまして、活用してみて感じた意義や可能性等について、市長と皆様で意見交換をしていただきたいと存じます。

ここからの進行は市長にお願いしたいと思います。

それでは、市長よろしくお願いたします

市長：どうもありがとうございました。それぞれに発表していただいて、時間が足りなさそうでしたね。もっともっとしゃべりたいという思いが詰まっておりますけれども、今日のつながるサンデーも、こんなに出張所がにぎわっているのは、私、本当に初めて見ました。縁側がオカリナのコンサート会場になっているのも、すごくよかったですね。オカリナは優しいイメージかと思いきや、山本リンダのビートが効いたパンチのあるオカリナを聞いて、すごく楽しかったです。

こうやって活用していただいて、いろいろな方たちが、いろいろな取組をやっていただいて、こんなにすてきな空間になるんだと。だから、さっきの話じゃないですけど、箱も大事だけど、よりソフト、どんなことが、どういうつながりがつくれるかなというのがとても大事だということを今日も感じさせていただきました。

それぞれ取り組んでいただいて、市民広場のところもそうですし、こちらもそうだとすることも紹介いただいたんですけど、課題もありましたけれども、取り組んでみてこれからの可能性を感じたという方、あるいはこれからもこんなふうに使ってみたいという方がいらっしゃったら、ご発言をいただければと思いますが、いかがでしょう。どなたからでも結構です。

はい。どうぞ。お願いします。田邊さんですね。

田邊さん：こんにちは。本日は出張所を利用させていただいて、感じたことをお話しさせていただけたらと思っています。

私は、先ほど市長さんからすてきだったよとお声をかけていただきましたけど、自主サークルオカリナぽっぽのメンバーの一員で田邊と申します。

本日、その後ろのほうの縁側舞台で10時からと、12時からの2回にわたりまして、オカリナ演奏をさせていただきました。メンバーは11人、平均年齢は73歳です。みんな言わないでと言うんですけど、元気いっぱいなので、ぜひ私は言いたいと思って発言させていただきます。

今日のために一生懸命練習を重ねてきました。何せ年齢が年齢ですので、皆様にオカリナの音色が果たして心地よく響いたかなというのが、ちょっと心配だったのでですけども、今、終わって、ほっとしていることです。

現在、私たちは、向丘出張所の会議室をお借りいたしまして、週1回、9時から5時まで練習をしております。すごいですよ。でも9時から5時まで、ずっと練習しているわけではなくて、おしゃべり半分、もぐもぐタイムあり、その中にやっぱり大事なのは笑いかなというふうに思っています。それがありまして、ずっと9時から5時までしているわけではありません。

今こうやってお借りできているからこそ、私たちが活動できるんですけども、以前はもう会場がなく、オカリナなんかできる場所がないんですね。それで借りるとすると手続も難しいし、日にちも、みんなが借りたいのは同じですよ。なので、なかなか借りられない。本当に悩んでいた時期もありました。でも、この向丘出張所をお借りすることができてからは、非常に落ち着いて、練習ができるようになったんですけども、オカリナは1人でやるととても音色がきれいですが、大勢でやるとすごい騒音に聞こえるんじゃないかなんて、特に練習をしているときは。ということで、出張所の事務所にもきっと大きな音が聞こえているんじゃないかと心配しながら練習していて、皆、気をつけながらやろうねと、そのときはやるんですけども、何せ73歳、すぐ忘れてしまいます。

でも、ここの所長さん、すごく優しく、いつもいつも声をかけていただくんです。本当にうれしく思っています。そして、職員の皆様も私たちのことをすごく温かく見守っていただいて、私たちはすごく幸せだと感じます。おかげさまで、私たちは、もちろんチーム力アップ、健康アップ、意欲もアップ

で、何とみんなで100歳になるまで楽しく演奏しようということが合い言葉です。音の出る楽器なんですから、できるだけ、いつまでもみんなで仲よく演奏していけば健康にもつながると思ひまして、ずっとやっていきたいと思ひます。

そして、あるとき月1度開催されておりますむかおかフェの川田向丘地区連合自治会の副会長さんから、練習のつもりでいいですからオカリナをこの場で吹いていただけませんか、というお声をかけていただきまして、私たちは天にも昇る思いで喜んで参加させていただきました。

失敗することも非常に多くて、もっともっと頑張つて練習しなくちゃねなんて反省もするんですけど、何よりもうれしいのは、こんな年齢になつても声をかけていただけるなんて、なんて幸せなんだろうと思ひています。

私たちにもできることがあれば、カフェの中でも、それから出張所の中でも何かやっていることがあれば、音楽を通してですけども、ぜひ協力していきたいという意識も芽生えたのは事実です。

市長：ありがとうございます。田邊さん、ありがとうございます。よろしいですか。

思ひがすごくあふれ過ぎるぐらいあふれちゃつたので、この辺でよろしいでしょうか。ありがとうございます。

田邊さん：今後ともよろしくお願ひいたします。

市長：ありがとうございます。すてきな話をいただきました。

いろいろなものがつながっていることを感じさせていただきましたけれども、川田さん、お名前が出ていましたけど、どうですか。むかおかフェもそうですけれども、この公共施設をうまく地域のために活用していくという取組、積極的にやっていただいておりますが。

川田さん：そうですね。むかおかフェは向丘連合自治会事業協力推進委員会からスタートとしておりますけれども、自治会・町内会というのは、やはり行政とともに、安心・安全、そういったまちづくりをともにやってきておりますので、そういう面では本当に事務局も役所の方たちですので、本当にお互いが違う立場、できることも違う、でも、この両者が合わさつたことで、より推進していけるというふうに思っておりますので、私たちは本当に裏方でいいと思ひているんですね。

ですから、こちらは公共施設ですので、カフェとは言ひますけれども、交流スペースというのに重きを置いてやっています。

そちらに来てくださった方、例えばオカリナぼっぼさんが出てきました、とてもすばらしい演奏だ。じゃあ、うちのほうにも来てやってくれませんかという声をかけていただいたりとか。あとは相談員、ここにも1人来ていますが、相談員の方たちは本当に無償で、今、正式には3名おりますけれども、そちらの方たちも何かあつたら本当に気軽にお茶を飲みながらちょっと相談できるというところで、今やつと活用してくださったというのがありますので、そういう面でそことつなげてあげると。

やはりどこどこがつながつていって問題解決していくとか、その方たちの活動がより発展していくとか、そのバックアップをする、そういった裏方という立場でやっております。

市長：ありがとうございます。

先ほど説明していた小川さんの説明のときでしたっけ、1歳児健診と重なつていたんですか。意図してそこに日をぶつけたということでは全くなく？そうなんです。だから、そういう健診のときに、不安を抱えているママさんとかがきたら、こういうつながりがあるんだと、こんなすてきなことないと思

うんですね。

やっぱり行政としてもどうやってつなげるかということを考えているわけですが、もっと柔らかい形で自然に入っていけると、これは役所としてもやりたいことで、ただ役所が全部できないからという形で、むしろ役所がやるよりももっといいという、そういう取組をやっていただいているので、こういう連携はあるなど。わざわざぶつけたのかなど。むしろ、お願いしたのかなと思いましたが、そういう連携の仕方はありますよね。

山崎さん、マルシェのほうに参加したんですって。ちょっと何か可能性だとかというのを、課題でも結構ですけど、いかがですか。

山崎さん：地元カフェにカフェ店員として参加しました山崎といいます。辻さんに誘われて、カフェの店員をやるかということでしたのですが、区役所に来られる方や通る方に、ちょっとした喜び、非日常的な、こんなところにこんなのがあったんだみたいな、そんな感じで喜んでもらったのではないかと思います。カフェの円テーブルにかわいいテーブルクロスをかけて、うちのベランダで取れたというか、持ってきたお花をちょこちょこ飾って、皆さんに喜んでいただけて、とてもうれしかったです。

市長：ありがとうございます。

誘った辻さん、いいですか。

辻さん：外でやるということの意味がすごく大きくて、今、市長もおっしゃったんですけれども、たまたま何かあったときに、健診に来て外に出て見たら、そういうことをやっているという。

そういうところに、いろいろな方が出しているらっしゃると、みんな思わぬ出会いと、自分が気づいていないニーズにそこで初めて気づくということが実はすごくたくさんあって、この間もひろばマルシェに出させていただいたときに、カフェもあり、スマホもあり、ボードゲームもあり、ダイアログもあり、マルシェのお母様、いろんなハンドメイドをされる方がいらっしゃるんですけれども。例えば、ハンドメイドのものは若いお母さんたちが興味があるのかと思うと、実はシニアの方が、ちょっと孫に欲しかったけど、こういうお店は普段だと自分には入れないから、こういうところにあるとゆっくり見られてうれしいとか、思わぬニーズがすごくたくさんあって、そういうことに私たちは日々、気づかずに過ごしているんだけど、それが公共広場の広い場所であると、本当にすばらしいいろいろな出会いがあって、何かすごく可能性を感じました。

市長：そうですね、ありがとうございます。

やっぱり広場とかは何となく使っちゃいけないものだと思っているという、どこかで固定観念があって。この前、EXILEのMATSUさん、市民文化大使になっていらっしゃる方ですね、一緒にテレビに出ていたんですけど、そうしたら、宮前区役所の窓ガラスのところで、夜な夜な練習していた、やばい、こんなこと言っちゃってまずい、とかと言っているんですけど、いや別にまずくないですよ。何となく公共施設を使うことは何かまずいことをしちゃっているんだというイメージがあるんだけど、いや、そんなことないですよという感覚をもっとみんなで広げていければという思いがしております。

皆さんの取組は、すばらしい先行事例ですよ。南区長、ちょっと感想があったら、この時点でお願います。

南区長：最後に言おうと思っていたことも、すぐ言いたくなっちゃったんですけど、やっぱり宮前区、いろいろ活動されている方はたくさんいらして、その活動されているお1人お1人が自分が楽しければいい

というだけじゃなくて、どうしたらもっとみんなが喜んでくれるかとか、どうしたら地域がよくなるかということに思いを致す。それを実際にご自分で行動せず行政が何とかしてよというのではなくて、皆さんが自分で行動される、そこまで考えてくださる方がこんなにたくさんいらして。なので本当に安心して皆さんを信頼して、一緒に考えましょと、こういうふうに投げかけることができる素地、ベースがあって今日に至ったという感じで、もう皆さんのお話を伺っていて、ごめんなさい、最後に言おうと思ったことをここで……。

市長：どうぞどうぞ、言っちゃってください。また振りますから。

いろいろな方がいらっしゃいますね。今日は、アート関係で砂田さん、それから大高さん、お2人から少しコメントをいただいてもいいですか。では、砂田さんからいきますか。

砂田さん：振っていただいてありがとうございます。

ここでアート展をさせていただきました。先ほども出ましたけれども、本当に出張所の所長さんをはじめ職員の皆様がとても協力的で、私、ここのお出張所がその前も作品をここに置かせていただけるといいう、そういう芽生えがあったんですよ。もう6、7年前から。ここに今、課長さんがどこかいらっしゃるかもしれません。本庁かもしれませんけど。その頃からありまして、暦で声をかけて、この方たちの暦展にね。そこで私はいろいろな勉強をしているシニアの方もたくさんいらっしゃる、それを掘り起こすことがいいかなと思って、今回はやらせていただきました。出張所の所長さんをはじめ、職員の皆様にお礼を申し上げます。本当にすばしかったです。

それから、1つ残念なことは、ひよこ、それからシニア、そこが今お話を聞いていますように、非常に盛んですけど、その真ん中、生徒さんがなかなか来ないんですよ。私もアート展のときにはポスターを持っていったんです。ここに3つ中学校があるんです。だけど、やっぱり夕方、ここは8時45分から5時まで開いているんですけど、生徒さんは忙しいんですけどね。ひよっとしたら、部活をしないお子さんもいると思いますので、呼びかけてほしいという一筆を書いて配って歩いたんですけど、やっぱり駄目でしたね。

先ほど、市長がお話ししましたように、市民館はガラスの前ですごくやっていますよね。本当は、ここもそういう中学生に貸すような広場ができれば、私はもっといいかなと思っております。

それから、もう1つ、最後にいいですか。

市長：どうぞ、どうぞ。

砂田さん：川崎市をとて有名にしている、実はよく知っている、南のほうは夜の夜景で日本一ですよ。

真ん中はミュージアムがあって、音楽のまちですね。今度、新たな情報として、私は芸術の森をぜひ北につくってほしいんです。藤子不二雄と岡本太郎、そして市民ミュージアムがないんですよ。そこをバラ園の後につくろうというお話を聞きましたので、ぜひ早めの具体化をよろしく願いいたします。

市長：ありがとうございます。

今日、このつながるサンデーで、先ほどご紹介いただきましたけど、大学生と高校生が8人、今回手伝ってくださったんですね。ちょっとお昼と一緒にご飯を食べたんです。今も参加してくれていますね、ありがとうございます。そして、みんなに興味って何と聞いたら、絵を描くことという方がいらっしゃいました。聖マリの学生さんでしたけど。例えば、絵を描く、多分みんなもそう感じていると思う、何か発表したい、教えたい、教えられたいとかという、そういう欲求というのがもっと近くであつたら、

自分1人の楽しみじゃなくて、もっと広がるんじゃないかなと。だから、砂田さんと若い人たちがまたつながっていくというような広がりが出てくると、もっと楽しくなるのではないかなと思いました。

だから、今日8人の学生さんは、これにとどまらず、何かもっとつながろうという、役所だけがつながるんじゃないかって、みんながつながっていくと、もっと広がるなという、今日は可能性を感じたんですよね。ありがとうございます。

大高さん、いいですか、コメントをいただいても。

大高さん：アトリエ言の葉の大高と申します。

ここから歩いて2、3分のところでミタテビルという、1階にこうちゃんという居酒屋さんがあって、その上で障がい者のアートワークをやっているんですけど、去年、ここで絵のほうを展示させていただきました。そのときは、何かぺらぺらの三角の場所に貼らせていただいたんですけど、今はもうこの立派な木になって、また飾らせていただきたいと思っています。ふだんはいろいろな場所で展示しているんですけど、こういう近所でなかなか展示する機会がなかったの、利用者さんがここに来て、自分の作品とかを見ているときに、ご近所の方が声をかけてくださって、そのまま何か話が弾んで、ご近所の方たちと一緒にうちに遊びにきたという話があって、いい交流ができてうれしかったというのがあります。これからもこういう機会があったらうれしいというのが感想です。

市長：ありがとうございます。

すみません、いろいろなつながり方で、今思い出したんですけど、実は、障がい者の方のアートの展示会をやったときに、ある不動産会社の社長さんを僕がご紹介したんですね。すばらしい展示会だからと。そうしたら、そのアートにすごく感動されて、新しいマンションをつくるので、そのマンションの統一した絵をフロアごとに全部その人の作品で埋めるというので、購入いただいてということにつながって、何か一見アートと不動産って全く関係ないようにも見えて、実はそのマンションの価値がものすごく上がっているという話を聞きました。

だから、そういう、先ほどの偶然じゃないですけど、想定以外のこんなことには気づかなかったというのが、やっぱりオープンにしたときの楽しさであり、気づきだったりしますよね、辻さんからもお話いただきましたけど。ありがとうございました。

猪股さん：ひよっこ向丘の猪股と申します。よろしく願いいたします。

私たちは、平成24年にここの2階の会場が何か全部業務が区役所に移転しちゃうので、空くから何かやらないかと声をかけていただきました。そのときに、じゃあ、多世代交流をやろうと思って考えました。

どうしようかと思ったときに、ちょうど60過ぎ、定年になるおじいちゃんたち、おじいちゃんと言うと怒られちゃうんですけども、男性の方がたくさんいらしたんです。男性の方は、どうしていると聞いたら、散歩は行く、時間はあり過ぎてやることがないと。じゃあ、何か勉強とかしたいのか聞くと、勉強はしたくない、仕事も十分したからしたくない。じゃあ、何ができるか聞いたんですよ。子育てはしたことないから無理だなと。じゃあ、何だったらいいのと。孫は十分かわいがれると言うんですよ、孫だったら何とか見られると言うんですよ。じゃあ、分かった、孫育てをしよう。それだったら、何とか協力できるということで、ここの会場は上が空くので、その会場を借りてここでやりましょうということにしたんです。

場所を借りるには、まず会場づくり、力がないと駄目だし、場所をつくるから移動もしますよという、それは何でもできるというんですよ。ただ、どうするか段取りだけをつくってくれたらやるとい

うので、じゃあ、やりましょうということでそれから始めました。

ちょうどこの場所も協力して快く貸して下さって、私たちも女性の方はやっぱり来るとおばあちゃんは口がうるさいとか、おじいちゃんほうるさく言わないというんですよ。とにかく赤ちゃんをかわいがってくれる。だから、赤ちゃんを見たら思い切り抱きしめようと言って、おばあちゃんは黙って外で見ていようと。

そんなで何年もやってきて、たまたまコロナでちょっと中止になったり、参加者が少なくなったりしてしまっただけです。そのときに、ここの区役所の所長さん、役所の皆さんが声をかけて下さって、何とか広報しようということで、チラシは社会福祉協議会さんと、こちらの出張所さんで協力してつくって下さると言うんです。それだったら、何とか周りにチラシを貼ってくるからと言ってみんなで協力して、近くだけでも貼りましょうと、コンビニとか、ドラッグストアとか、いろいろと声をかけました。そうしたら、長く貼るのはちょっと困ると言うんです。長くじゃなくて、2週間ぐらい貼って下さいと。2週間貼れば、皆さんが通ったときに見てくださるからと言って、本当にそれでバルーンアートですか、アンパンマンをつくらうというのをやったんです。

そのときは、12名の方が参加してくださいました。それまでは、本当に2組から3組ぐらいで、どうしよう、どうしようと言っていたんですけれども、やっぱり広報によってこんなに違うのかということがありましたし、地域のおじいちゃんたちも元気にしようとかと言って、お母さんたちが赤ちゃんをだっこさせてくれるんです。全然知らない人たちに赤ちゃんをどうぞと言って、だっこしていいよとか、そのときの感触ですか、赤ちゃんをだっこする、それがとても心地よいというか、自分も何か元気をもらったという感じになるので、これはぜひやっていきたいと思うんですよ。

今度、こちら場所が変わりましたし、ここで、もしお母さんたちやママたちが何かイベントをするときに、じゃあ、私たちはその端っこでもいいから、子供と遊ぶ場所、おじいちゃんと一緒に遊んでほしいとか、そのようなことを考えているので、もしできたら、上と下と一緒に何かできて、つながればいいと思っています。

市長：すばらしいですね。

猪股さん：あと、もう1つお願いしたかったのが、今、時間帯によってはなかなか双子ちゃんとか、ベビーカー、その方たちがバスに乗れないんです。ここはバス停はすぐ近くだし、場所はとてもいいんです。でも、ベビーカーとか、双子では来られないというんです。バスに乗れないし、車で来てとめられなかったら入れないしというので、そんなことももう少し改善できて、気軽に来られるようになったらもっといいのかなと思って、それがちょっと今後の課題として、何か考えていただくと助かります。

市長：はい、ありがとうございます。すごくいいお話がいっぱい出てきますね。さすが宮前区という感じがします。さあ、あと数分ですけど、お願いします、小林さん。今日はお子さんと一緒に参加していただいたんですね。うれしいです。

小林さん：本当にうるさくしていて申し訳ありません。

市長：全然。ウエルカム。

小林さん：フレンド神木地域包括支援センターの小林と申します。

公共施設の地域化というお話だったかと思うんですけれども、私もこの間、大分いろいろな方とちょ

くちよくお話をさせていただいております。というのは、地域包括支援センターとしても、地域づくり、ネットワークづくり、まちづくりに関わっていくことが、介護予防支援にもつながっていきますし、生きがいづくりにつながるということは、単純に私たちが高齢の方のお宅に伺って、介護保険を使いましょうか、デイサービスに行きますかというだけじゃない、その方たちがやれる役割につながっていけば、決して介護保険を使うだけではなくて、生活が豊かになっていくということをもっともっとやらなくてはならないんですけど、なかなか私たちは、行けばすぐ介護保険の話をしてしまっているような状態がありまして、地域づくりをもっとやっていきたいと思っています。

これは、例えばですけれども、公共施設の地域化ということは、地域の施設の公共化ということだっ
て、お互いに寄ってあげればいいのかなど思ったりして。例えば、地域包括支援センター、うちは特別養
護老人ホームもくっついていきますので、そこには地域交流スペースを設けなさいということで、一応あ
るんです。

では、活用はできているかというとなかなかだったり、デイサービスの施設もやっていない時間は閉
まったままですけれども、ある意味では、介護保険のサービスですので、そこが多少公共化できたりし
てもいいのかなとか、普通の一般のお宅であっても、公共の道路からお宅の合間にグラデーションとい
うか、境目のあるようなお宅であれば、その駐車場で何かやっていたらいい方もいますよね。

小さくカフェを試してみるとか、何かどっちも公共化だけじゃなくて、それは施設が公共化していつた
り、地域が公共化、公共の施設が地域化、両方寄っていくということは、人もだんだんとプライベート
の子の母親として、うちの子がうるさくてごめんなさいから、一住民として、ここがちょっと気になる
というようなことだったり、他人であっても気にし合うまちづくりにつながっていくと思っているので、
こういう場面でお話をしたりして、うんうんと言ってくれる方と、また冊子だったり、少人数でお話
できる場だったりをどんどんつくってあげればいいのか、包括支援センターとしても、それを地域圏域
会議みたいな形をつくっていききたいとも思っていますし、企画課さんのやってくれるようなSDCと
言うんですか、そっちの方向にも参加させていただきながら、何か新しいものができたら面白いと思っ
ています。よろしくお願いします。

市長：ありがとうございます。むちゃくちゃいい話ですね。公共施設の地域化だけでなく、地域にある
民間施設の公共化というふうな、そっちもあるだろうと。本当に素晴らしい。ありがとうございます。

なかなか今までは、いろんな施設が、とにかく箱が足りないと言われたんですけど、よくよく考えて
みたら、結構箱はあると。それは、公共施設もあるし、今おっしゃったような民間施設、特別養護老人
ホームさんにも地域交流スペースってあるけれども、コロナだったから非常に使い勝手が悪かったと、
使えなかったということもありますけど、いよいよコロナが明けてくると、私たちの地域の価値が問わ
れると思うんですよね。

ですから、箱だけでなく、そういうふうに先ほどから言っていたように、つながりの
手法という言葉を藪本さんからいただきましたけど、そういうようなことが、みんながお互いにでき合
えるような地域というのがすごくいいところだと思いますね。ありがとうございます。

時間が来ましたので、一旦ここで第一部は終了して、次、第二部のほうに移っていききたいと思います。

司会：皆様、ありがとうございました。

<市長との意見交換②>

司会：続きまして、今回事例として紹介いたしました区役所市民広場について、活用に向けて立ち上げた宮
前区役所市民広場活用検討委員会の委員も担っていただいている細谷さんに、検討委員会の目的や役割

等を説明していただいた後に、今後の地域と行政の1歩進んだ関係性について意見交換を実施させていただきます。

細谷さん：まちづくり協議会、宮前ガーデニング倶楽部で活動しております細谷です。

これからは、市民広場の活用に向けての規則の話ですので、皆さんのように和やかなお話にはならないと思いますが、いましばらくちょっとお耳を拝借したいと思います。

区役所市民広場の活用方法は、皆さんがいろいろとお話をいただいておりますが、いつも市民広場というのは、区役所を訪れた区民がちょっと休んだり、近くの保育園の子供たちが走り回ったりしています。また、以前には、高校生たちが土曜日、日曜日に、先ほどのEXILEの松本さんじゃないですが、市民館のガラスに自分たちを映しながら、ダンスの練習をするなど、自主的にそれでも規則があるということで、内緒でそっと見えないけど見えているダンスをしていました。それで、先ほどのお話にもあったように、EXILEの初期のダンサー3人が練習をしていたと。地元ではとても有名な場所です。そして、実は、30年近く前にはフリーマーケットなども開催されて利用していたところです。

こんな魅力ある場所がいつの間にか市民らの利用がないままになっていきましたが、令和4年度に実施した宮前区地域デザイン会議において、区内の公共施設の活用事例の紹介や課題の共有を行う中で、宮前区役所の市民広場を活用できるのではないかと話になりました。これはみんなが集える地域の居場所、まちの広場の1つではないかと思い、区役所の方と一緒に、この公共施設の利用をしていくための方法などの検討を進め、まずはお試して、先ほどのグループの方たちと一緒に利用の計画と、それと並行して、宮前区役所市民広場活用検討委員会を立ち上げ、検討を行ってきました。

試行的に立ち上げた検討委員会では、基本的には場所を借りるだけですが、その責任は企画立案する市民にあり、行政は後ろから応援監督をするということに、この方法を実現するためには、施設を利用したい区民が、まずは検討委員会の委員として登録し、活用の目的や実施の内容を検討委員会に提案する形としました。

この提案をその他の検討委員会のメンバーとで審査し、公共性、公平性などが確保された取組か、事故が起きないように十分に配慮されているかなどの観点を踏まえて検討を行うとともに、さらに提案された行事等が地域でのつながりや課題などの解決と、新たなつながりをつくり出すことができるかを確認し、多様な区民が協働・連携した行事等になるよう、意見を述べることとして検討しています。

このような議論を踏まえ、検討委員会の委員の過半数の承諾を得ることで、検討委員会としての後援を決定し、その結果を区に報告した後、最終的に区が検討委員会の判断を尊重して、市民広場の使用について可否を判断するという流れになりました。

大変堅いのですが、どうしても行政という立場からすると、手放しではできないというルールですね。こうしたルールに基づき、試行的に実施したのが先ほど事例として紹介したフリーマーケットや地元カフェなどのイベントになります。

これまでも区主体のイベントは実施されてきました。例えば、太鼓ミーティングなどがありますが、そのイベントの全責任が区、行政にありましたが、地域からのニーズに応えるために全て区主催の事業として実施するには限界があります。

今回、この事例のように、区民が議論に参加できる場を設け、ただ使いたい人が集まって決める場ではなく、地域にとって何がよいのか、それぞれが責任を持って議論し、その責任を自覚しながら実行することで、区民主体の取組を一層進めるきっかけになると感じました。

今後は、活用している様子を見て、興味を持ってくれた人をどう巻き込んで、活用を広げていけるか、また、どうしたら1人の小さなアイデアを拾い上げて形にできる場になるかなど、さらに議論をしていきたいと思っています。

司会：発表をありがとうございました。

ここから、改めて意見交換を行います。進行は市長にお願いしたいと存じます。

それでは、市長、よろしくお願いいたします。

市長：ありがとうございました。細谷さんから説明をいただきましたけれども、検討委員会でこういう議論をしていただいたということ、本当にありがとうございます。

先ほど役所の立場を説明させていただいたように、私たちもルールに基づいてやっていかないと、なかなか公平性が担保できないということがあるので、様々なジレンマがあると。その役所の論理だけじゃなくて、今言っていた、住民側にとって、お互いにとって、それぞれの役割とかというのがありますが、それをうまく対等な立場で議論をして、ルールづくりをしていこうというご提案をいただいたと。大変すばらしい検討をいただいたと思っています。

これから、この新たなチャレンジに1歩踏み出していくということになると思うのですが、皆さんからどうでしょう、ご意見をいただければと思うのですが。

秋岡さんから行きましようか。

秋岡さん：秋岡と申します。

いろいろ皆様今後の公共施設の有効活用ということで、メニュー出しをしていただいたんですけど、その後、私はこの夏に広場で16ミリのアニメ映画を上映したいということをちょっと考えております。おかげさまで、川崎市の視聴覚センターには視聴覚ライブラリーということで、16ミリのフィルム映画がたくさん所蔵されております。ですが、私の知る限りではあまり活用されていなくて、おかげさまでフィルムに傷もなくて、全然ビデオ映画と遜色ないようなフィルム映画がたくさんございます。

2月に土橋小学校の特別活動室をお借りして上映しました。子育て中のお母さんたちが、お父さんもそうなんですけど、16ミリのフィルム映画という映写機を見たのは初めてだと。しかも、子どもたちはカタカタという音の中でアニメの動画、あのときはディズニーのドナルドダックだとか、ミッキーマウスを上映したんですけども、非常に好評でございました。

そういうものを今度は、市民館、区役所の間の広場のところで夜、野外上映をしたいということで、こちらに出ている計画の後に続いて、ちょっとさせていただきたいということを考えております。

映写機を外に据え付けて、電源をどこから取ろうかというのが悩みの種でございますけれども、そういうふうなことを考えておりますので、もし、今後チラシが出来上がったら、皆様ものぞきにきていただければと思います。

一応、日程としては、8月の夏休み中に上映できればなど。しかも、床にはシートを敷いて、お子様を膝に抱きながら、夜外で映画を見るというふうな体験をしていただければということを考えておりますので、側面からのご支援をよろしくお願いいたします。

市長：秋岡さん、ありがとうございました。新しい取組に挑戦されるということで、ちょっと私の質問の仕方が悪かったかもしれません。

今、細谷さんから説明させていただいたように、地域と行政の新しい関係性について、どういうふうにお互いの住民と行政のルールづくりをやっていくかということに絞ってコメントをいただければと思いますが、藪本さん、どうですか。

藪本さん：ありがとうございます。

細谷さんから議論という単語がいっぱい出てきたのですが、その議論の内容を少し変えていくことが大事かなど。先ほど対話って言いましたけど、あまりいい訳語じゃないんですね、対話というの。もともと持ってきた考えをお互いに対論でぶつけ合わせるという場じゃなくて、今日のように誰かファシリテーターがいて、そして皆さんの声を聞いていく。その聞いていく時間こそを大事にしたいと。

なので、もしできれば、皆さんの声を聞く場と、そして、決める場を分けていくというのは1つ方法だと思います。聞いた声をちゃんと自分でもう一度繰り返して、反すうして、そして最終的に結論を出していくというような。

市長：ありがとうございます。そういう意味では、今、細谷さんから議論の経過がありましたけれども、やはり決める場というのは、過半数の人たちがそうだねと、公共性があるねというふうなところで、少し役所とは違う第三者の委員会で決めていくというところと、それから、今、藪本さんが言われたような、もっと多様な意見を聞く場があってもいいのではないかというお話ですね。ありがとうございます。辻さん、いかがでしょう、このルールづくりというか。

辻さん：この検討委員会ができることで、ひろばマルシェとかをやったときでも、さつきmama-on!の方もおっしゃっていましたが、出店したいんだけどという方がいろいろなところからいらっしやるんですね、それは個人としていらっしやるんですけども。

先ほど区長がおっしゃったように、個人の楽しみとして自分が出たいというところから、この検討委員会に入られて、ほかの皆さんと出会うことで、自分の楽しみだけでなく、みんなで場をつくっていくということがどういうことか、公共施設を使って楽しむということがどういうことかとか、検討委員会がそういうことを考える場になると思うんですね。

そのときに、区役所の方が考えていらっしやるようなことも教えていただいたり、私たちでは気づかないようなこと、例えば、私たちは備品を貸してほしいとよく言うんですけども、そのときに実はどういう障害があるかということをも具体的に教えていただいたりですとか、いろいろなことを話し合える場、それがダイアログなのかもしれないかもしれませんが、その検討委員会があることによって、個人から市民になるというか、そういう場であるし、区役所の方から市民に近づいていただける、そういう場になるということで、すごく期待をしています。

ただ、そこがあまりにも回数が多いとか、重荷になっていくと大変なので、そこら辺のあんばいというのはすごく大事なんだろうと思うんですけども、いろいろな方と使うことを対話できるという、そういう場となっていけば、本当にすばらしいんじゃないかと思っています。

市長：ありがとうございます。すばらしいご指摘をいただきました。

中里さん、もしよろしければ、いかがですか。

中里さん：ゆ〜ずツクルブの中里です。ふだん、ゆ〜ず連絡会という団体の下部組織でお母さんたちのハンドメイドのところをやっているんですが、本日は出張所の装飾をさせていただいて、割と出張所の方々の市民、一市民の団体の関係性が近い団体ではあるとは思っております。

ここまででは、私たちが手を出している部分、区の職員さんたちからは、これ以上やってもらうと困るという、多分線引きがあると思うのですが、それが民間の私たちの線の引き方と、役所の方々の線の引き方がまだ多分一致していない部分がどうしてもありますので、私たちはこれをやりたいんだけど、どうしてできないんですか、でも、役所の方々はきっとルールがあって、それ以上はできないですという

部分をもうちょっと話し合っていないと、やりたい、やれる箱がそれこそ区役所の前の広場であったり、今はここでできましたけれども、やりたいことがあるのにできない歯がゆさを持っている民間の人間と、やってもらっていいんだけど、それ以上はできないという役所の方々の思いがどうしてもありますので、そういうのをもうちょっと会話できる場があればいいのかなと思うのと、こういう場に出てこられる団体さんと、出てこられない団体さんもやっぱりいますので、その人たちともつながっていければ、こういう段階を踏んでいけばできるということも、もうちょっと広がっていけばいいと思います。

市長：ありがとうございます。先ほど辻さんが言われたこととすごく重なるようなお話ですよ。

やはり、役所から見ているのと、市民側から、利用する側から見ているところ、少しお互いが歩み寄っていくという場があると、辻さんの言葉を借りれば、個人からもう少し市民にというふうな形になっていくと。役所から市民側になっていくというふうな、そういうような形じゃないと、いつまでたっても何となく歯がゆいなと。お互いということになるということですよ。僕もすごくそういうことって感じます。

もう何年も前から、市民館って何でお酒を飲んではいけないんだろうと思っていたんですよ。何でいけないんですかとか、そういうことをあまり公で言わないでくださいと僕も怒られたんですよ。

等々力の公園なんかでも、あそこは何でお酒を売っちゃいけないんですかとか聞いたら、あれは保健所で禁じられているんですよ。何でと言ったら、すごく昔の解釈で、お酒を飲むと所々でおしっこをしちゃうからと。え、そんなルールがあったのと。そんな理屈は通用しないから、ちゃんと合理的な説明をすれば、そんなことはないよねと。今の時代ではそんなことはあり得ないんだからという、何十年も昔のルールでやってきたということを今の時代に合わせていくと。

でも、そのためには、先ほど中里さんが言われたように、自分たちのルールというか、責任だというものを含んで、自分たちでつくっていくということがない限り、ルールは後は役所が決めておいてと言ったら、結局のところ誰も満足しない形になってしまうということなので、やはり先ほど来の対話というか、ダイアログという形を通じて、ルールづくりを決めていくということが大事かと思っています。

石川会長は、やはりいろいろな地区の会長さん方のご意見だとか、調整というものの大変さを一番日々感じておられるようなお立場だと思うんですが、今までのルールを役所の論理とか、あるいは市民の論理というのを超えていこうという、そういう感覚というのは石川会長から見ると、どういうふうにお感じになっておられますか。

石川さん：連合自治会、石川です。どうもお世話になります。

皆さん、向丘つながるサンデーへようこそおいでいただきました。

今のお話を含めて言うと、市民といわゆる行政の間に挟まれているのが、連合自治会の会長なんじゃないかと。どうしよう、どうしたらいいんだろうかと、いろいろと考えて、身につまされることもあれば、どう説明して次につなげて、皆さんと引っ張っていくかとか、そういうことを考えました。

いろいろこの議論の沸騰する中、私が今日、向丘つながるサンデーをやりまして、まさに行政の皆さんと我々のはざまに挟まれた人間と、それから市民の皆さんとが共同でできた、具現化されたイベントだったと思います。

今日は16団体も集まっていたしまして、その中でいろいろなことをやってきました。焼きそばをやったり、野菜を売ったりとかいろいろな食品も売ったりしました。そういう意味ではこれから行政とやっていこうということのまず第1歩として、つながるサンデーができたかと。

そして、先ほどからお話があるように、これからどうしていこうかという、今いろいろな委員会をつ

くって査定されたりすると、非常にまた大変な状況に追い込まれるところもあるかもしれない。その間に挟まるのは我々なんですけれども、そういうことを思えば、ある一定のルールをつくっても、ある程度加味していただいて、柔らかくソフトに、ソフトランディングできるような状況をつくっていただいて、いろいろなものを活用していきたいなど。

今日のつながるサンデーは、まさにその1つの景色が始まった感がある。先ほどインタビューを受けたときに、もうこういうことにつながりをつなげるエブリデーにしたいと、そう思いました。そういう間に挟まれるのは私たちがいて、それはいいんです。

ただ、本当に楽しかった今日1日でしたけど、それを踏まえて今日の議論の中で、やはりみんなといういろいろなことをやりたいんだけど、そこもちゃんと相談に乗ってくれる場をつくる、場の提供、それが我々を含めて、そしてこの出張所の皆さんを含めて、大事なことだと思います。いろいろなことを相談されて、お互いに相談して、それで、市民広場でもそうでしょうけど、そういう日とそういう相談ができる場所と先ほどお話ししました対話ができる、コミュニティができる、コミュニケーションができる場をどんどんつくって行って課題解決をしていきたいと思えますし、改めて我々の存在も必要だと感じました。今日はありがとうございました。

市長：ありがとうございます。石川会長の力強いお言葉をいただいて、本当にご苦勞をおかけしておりますけど、挟まれているというふうにおっしゃいましたけど、いやいや、つないでいただいているんです。つながるエブリデー、素晴らしいお言葉をいただきました。

川田さん、いかがですか。川田さんも本当にいろんなところをつないでいただいていますけれども、つながるエブリデーに向けて。

川田さん：私は、あまり難しいことはあれなんですけども、本当に宮前区役所も行政も、職員たちが随分変わりました。職員も職員ではあるんですけれども、1人の地域人で、そちらで暮らしていて、これからお辞めになっても地域に戻っていくわけですね。そのときに、自分たちはどういう地域づくりをしたらいいのかということと一緒に考えましょうというところで、行政のルールはあるんでしょうけれども、そこからちょっと離れたところで、でも、ルールと思惑とは違うんですね。職員の人たちもこれはルールがあるからできないんだけど、でも自分はこういうふうには思っていると、割とこちら側の考えを持っていたりするんですね。それは、やっぱり生活人だからだと思うんですね。

そういったところで、なるべく今までグレーだったところをホワイトにしていこうという、そういった力が出てきたというか、それで結構宮前区、ほかの区は分かりませんが、区役所はとてもそういう意味では、すごく柔らかい雰囲気があるというか、出張所も職員たちは本当に1人ずつにすごく目が行き届いて、とてもそちらの立場でやっていますけれども、区役所側の職員もそうなんです。特に、地域の人たちと一緒にやる人たちというのは、なるべく地域の人たちに沿ったやり方をしようという、そういった考えが出てきておりますので、そういう面ではすごく変わったと思えますし、それが今の市民広場にもつながっていったと思うんですね。

役所はいいんですけれども、例えば、委員会があります。委員会は民間がやっていますよね。事務局は行政がやっていますけれども、ある委員会で、いやいや、じゃあ、事務局はどう思っているのみたいな話があったんです。そうじゃないと。事務局じゃなくて、委員の人たちが考えるんだよ。そこで考えて、自分たちがどういうふうにはやっていくのか、そのために行政のほうは、区役所のほうはどういうことを求めていくのかということ私たちが考えるのよとお話するんですけれども、やっぱりそこが今までは行政先行的なもので、それでいいと思っている役員も多かったと思うんですけれども、これからはそうじゃないと思う。役所が変わっていくのであれば、私たちの考えも変わっていかなきやいけないと

思っ、今やっっているんです。

だから、みんなで集会しましょう、対話をしましょうじゃなくて、その日々の職員とのやり取りの中で、本当にフレンドリーに、一緒に同じことをどういうふうにしてやるか、私たちではこれはできない、でも、役所の人たちだったらできる、じゃあ、ちょっとそれを一緒にやっっちゃう。その代わり、役所の人たちが、あまりこの地域の中までは入っていけないですよ。そういったところは、私たちができるから、そこは私たちがやりますよ。こういうふうにして、ある程度できること、できないことを明確にしていったほうが良いと思っ、今活動しております。

市長：ありがとうございます。すばらしいです。ありがとうございます。

私もそうですし、職員もそうですし、与えられている権限というのは、これは全て市民の皆さんを幸せにするために委任された公権力なわけですよ。だから、ルールづくりも条例もそうだし、あるいは、こういう役所の要綱みたいな話というのものも、全部人々が幸せになるための1つのツールというのをつくっているんで、まさかそのルールが幸せにならないものになっていたとすれば、それは変えていくべきだし、それは役所というよりも、今おっしゃっていただいたように、みんながちょっとずつ変わらなくちゃいけないと。

今回、僕は南区長にすばらしいねと言っしたのは、やっぱり自分たちの区役所としての困り事、こんなことに悩んでいるんですということさらけ出す。さらけ出したところから始まるということはあると思っんです。こちらはこちらで悩みがあるのを、隠してというか、ある意味、区役所としては、市民の皆さんの困り事を聞くとというのが私たちの仕事と思っっている部分があっ、私たちがそんな市民の皆さんに困り事を言っちゃっでどうするんだというふうなところがあるけど、現実問題は、やっぱり困っている部分があるんですね。

だから、そこをやはりみんなオープンにして、お互いがさらけ出す中で、どうやったら一番幸せに役割を果たせるかということ会話を通じてやっていかなければならないのではないかと。それがこれからの持続可能な役所の在り方だったり、地域の在り方だったりというふうと思っしております。ありがとうございます。

阿久津さん：mama-on！事務局の阿久津です。

グレーをホワイトにというお話があっと思っんですけど、私たちもママたちの活動をしていまして、その中でmama-on！という冊子を通して、ママたちに幸せをというふうと思っしているんですけども、それが知れ渡らない、認知されないことには、活動の意味もないと思っ、ご近所コンシェルジュにうちの小泉が参加させていただいたことで、区役所の方とのつながりができて、今回のこういう活動にも参加させていただくことができたんですけども、そういうつながり方というのが分からない方、ほかに来られない方もいらっしゃるという団体さんもいっぱいいらっしゃるんで、そういう方たちとどんどんつながれて、皆さんがこういう場に来られるようになっていけば、もっともっと私たちも学ぶことも増えて、みんなが幸せになれるのかなと思っました。

市長：ありがとうございます。先ほど小泉さんですかね、小川さんだったか、どちらかがやっぱり自分たちのイベントを知らせるというツールってなかなか大変だよというお話があっと思っんですけども、それぞれの活動を知らせたいというのは、やはり団体としてはあると思っんですよね。

けど、どうだろう、僕は今ちょっとアプローチとして、共通のプラットフォーム、知らせるツールというものをむしろ宣伝して、その中に情報を入れていっ、多くの人たちに見てもらおうと。

自分の団体のイベントのチラシを配るよりも、公共のプラットフォームみたいなものをみんなで宣伝

すると、お互いの情報というのがどんどん渦が大きくなっていく。だから、巻き込むために自分のじゃなくて、公共の共通のプラットフォームをみんなで宣伝していくと、何かよくないかなというふうに思ったんですね。

小泉さん：地域の情報をどうやってお伝えするかというところで、まさにご近所コンシェルジュというところは、もっと宮前区の情報をどうやってお伝えしていくかとか、子育て世代にどう参加してもらえるかというお話をしているので、このコンシェルジュのホームページにその地域情報とか、そういったものを入れていこうかというところではお話しはしていたんですけど、各団体の情報もどんどん載せていってもいいんじゃないかというふうに、市長はお考えだというところよろしいですか。

市長：そうですね。例えば、最近コロナでイベントごとがなくなっていたので、もうほぼ機能しなくなりましたけれども、昔は子育てアプリをやっていましたよね。あまり情報が更新されないことで、すごく下火になっちゃったものがあるんですけども、実は、考え方としてはああいうことです。行政側からのプッシュの情報も出したい。だけど、そこにつながっているというか、同じ子育てのこの世代の方だったら、このmama-on!にはぜひ参加してもらいたい、そういう情報がプッシュで配信されてくるということがいろいろなイベントごとにあっていいのではないかと。例えば、アートイベント、興味のある人、自分がアートにも興味があるという方には情報が飛んでくるとかという、そういうものがあればいいなど。

だけど、ツールみたいなものを宣伝するのは常に役所だったりするわけです。役所が宣伝する能力って大したことがないんです。伝わるところには伝わるんですけど、伝わらないところには延々と伝わらないという、この行政の性みたいなものがありまして、そこは市民の皆さんが宣伝マンになって、どんどん、どんどん広げていく。

そうすると、共通のプラットフォーム自体が大きくなっていくので、結果的には自分のところに帰ってくる。より多くの人たちに自分のイベントのことを知らせることができるという、そういうものにみんなで作って上げていくということが大事なのではないかなと思うんですね。

だから、個の利益よりも共通の利益というふうなものといったところにもっとみんなが力を注いだが、実は私たちそれぞれに恩恵を受けるというような気がするんですね。

小泉さん：今の行政からのお知らせって、届くところには届くけど、届かないところには届かないという話で、まさにこういう地域で何かやっという会議とか、こういう情報とかも本当にそうだと感じていて、何かこういう場でこういうことを言っているのか分からないですけど、こういう地域の会議とかに来る方って、こんにちは、久しぶりとか、いつも大体なじみのメンバーみたいな感じになってしまっていると思うんですね。

なので、この今回のこういう検討委員会とかに参加したいと思っても、どうやって参加したらいいかわからないとか、参加していいのかなと思うとか、入り口が分からなかったりとか、狭かったりすると思うんですね。こういう場に参加している今のこのメンバーだけでも、私たちは子育てママにアプローチしたい、ほかはもっとシニア世代にアプローチしたいとか、いろいろな思いを抱えてやりたいと思っている方がいらっしゃると思うんですけど、そういう方たちがもっと参加しやすいような形にすることが、この検討委員会だったりとか、地域というものを活性化させていくためには、すごく必要だと思っていますし、あと、すみません、子育て世代とか、若い世代の方に参加していただきたいとすごくおっしゃっていただけるんですけど、正直、時間とお金がなかったりするんで、こういうところに

なかなか参加するのが簡単じゃないというところがあるんですね。

なので、もし可能であれば、そういったところに対する行政からのある程度の支援だったりとかというものがいただけると、検討委員会というところで、例えば核として動いてくださる方たちが本当にこの善意のボランティアで動いてくださる方々がいっぱいいらっしゃると思うんですけど、正直そこだけに頼っていると回らなくなることがいつか来るんじゃないかと思っているので、そうならないように、せっかく持っている情熱を絶やさないようにするための支援というのは、行政からいただけるとお互いがうまく回っていくようなものになっていくのではないかと考えているので、この場ですみません、言わせていただきました。ありがとうございます。

市長：なるほど、ありがとうございました。これは、お金の話になるんですかね……。こういうことかなと理解しましたが、これって僕たちの中でもいつも議論があるんです。市民の税金の公金をどういう形で支援という形にすると、持続可能な形になるのか。ずっと市民のお金が入るとのこと自体に、果たしてそれは本当に妥当なのかという議論ってずっとあるんですよ。

この辺りもやはり議会でもいろいろな議論をしていますけど、これはちょっと今ここでやりますとかというふうな話ではないんですけど、バランスの問題だと思っています。結局は、行政のお金が入り続けなければ続けるほど、それは何か官製なんちゃらみたいになりますよと。そういうイベントだったり、団体活動だったりというのは、もう半役所だよなというふうな形。お金が入るとことは、必ずその説明が求められますから、その報告というのを市民にオープンにしないではいけません。

とすると、本当にそれってやりたかったことですかということに立ち戻ってくるようになってしまうというのは、先ほどの責任とやりたいこととのバランスと似たような話なんですけども、そのところはやはり、それこそ対話をしていく必要があるのではないかと考えています。

藪本さん：これだけ市長がパワフルに私たちのところに降りてきてくださっているの、やはりどうしても言いたいんですけど、対話というのは、人の話を聞くほうが大事なんです、話すよりも聞く。だから、聞いて、ここで自分が変わっていくというのが実は求められている。なので、例えば、私が自分の宣伝をするのではなくて、オカリナの田邊さんのプロジェクトの宣伝をする。もしかしたら、さっきの話を聞いて思ったのは、古い古いレコードなんかを持ってきて、みんなが当時の物語を語り合う、そういう場所が例えば弁護士さんなんかの相談室の隣にあったりとか、そうすると、弁護士は事実を時系列に聞いて戦うのが仕事だけれども物語を聞けない、そのときにやっぱり田邊さんのところは物語を聞く。そうすると、どんなに心やすいだろうという、そういうようなミックスする、交差するような縦横無尽な関係性がやっぱり本当にこのまちに必要なだと今感じました。

市長：ありがとうございます。

大分時間が迫ってまいりましたけれども、いかがでしょう、新しいルールづくりみたいな話で、細谷さんが提案していただいたようなことというのは、これからぜひ区中心に皆さんと一緒に作り上げていってもらいたいなど。それというのは、本当にこれほどこの区でも同じ課題を抱えて、全市的な課題なので、それはお願いしたいと思うんですけども。

川田さん：交流スペース・むかおかフェのお話なんですけれども、うちは今実行委員会になっています。援助は今のところ受けていないです。最初にスタートするときには、連合自治会のほうからいただきましたけれども、今はなるべく自分たちで賄うようにしています。

こちらでは、代金を取ってドリンクを提供することができませんので、地域事業活性協力金というものをいただいた方にお礼でドリンクを差し上げるという形にしています。その助成金が集まりま

したら、例えば地域で活動している方、例えば子育ての方とか、そういう方たちがもうちょっと広がりを持ちたい、もっとどこかにつながりたいというようなお話があったら、この交流スペース・むかおカフェ実行委員会で、それを一緒に考えてバックアップしていきましょう、そのための資金としますというふうにしてやっているわけです。

ですから、本当にこの出張所の方たちにいつも実行委員会には出ていただいて、私たちができないところはちゃんとバックアップをさせていただきますので、そういう面では、いろいろな情報もいただいたり、手も貸して下さったりしますので、例えば、mama-on!さんとつなげて、私たちとつながって、じゃあ、何をやるかというような、そういうふうに戻していきたいというのがこの交流スペース・むかおカフェです。

市長：ありがとうございます。

もう役所も大分、これから市役所全体も変わってくると思うんです。というのは、手続もほぼ全てのものがオンライン化されてくるという形になりますし、今、AIみたいな話にもなっていますが、役所の機能が昔とは全然違ってくる。だから、ここも、出張所も昔はもっともっと手続というものが多かったと思うんですけれども、むしろ人が集い、交流するといったところ、今回のこの出張所の意味合いというのがすごく大きくなってきたと思うんですよね。

この場を通じて、人がつながるということ自体が、いかにこの地域に住み続けられる地域になるかどうかという、まさに試金石のところだと思うんです。ですから、繰り返しになりますけれども、私たち役所も変わらなくてはいけないし、市民の皆さんも今までの、何か役所がやってくれるんではないかというような感覚では、それだとみんなが楽しくなくなってしまうということなので、ぜひ冒頭に藪本さんが言われたように、対等な立場で議論していく、対話していく、ディスカッションを深めてコミュニケーションを取ることによって、最善な道はどういうことなのかということを探っていく、つながるエブリデーをやっていくことが僕たちにとってもすごく大事なんだということを、今日いろいろな方から学ばせていただいた思いです。

ぜひ、この取組をさらに前に進めていきたいと思っています。

<まとめ>

司会：皆様、ご協力ありがとうございました。本日のテーマ「公共施設をもっと地域のために使いやすく！」の意見交換はこれで終了となりますが、最後に福田市長と南区長から、全体を通しての感想、コメント等をいただきたいと存じます。

南区長：皆さん、長時間にわたりありがとうございました。

1点、お伝えしたいなと思ったのは、先ほど最初の発表の中に、公共の庁舎だからここでやっていることって安心だよねという、怪しい者じゃありませんという安心感という利点があるというお話をお2人ともおっしゃっていたかと思うんですけれども、やはりそういう意味での価値というのは、公共施設にはあるというのも改めて思いましたし、例えば、市民広場の委員会では、その辺の折り合いですよね。ここまでだったら、その価値を保ったままできるよねというものを皆さんと一緒に探していければと改めて思いました。

それから、職員がすごくよく声をかけてくれるんですというお話もたくさんの方からいただいて、本当にうれしく思いましたが、逆に私から申し上げたいのは、本当に皆様が職員を温かく育ててくださっていて、そのおかげで、職員も地域の皆様と仕事をするということに喜びを見い出しますし、区役所の職員として成長していつている。本当に皆様方のおかげで、そういった中で、テーマとして公共施設の

地域化と一緒に話し合うことができるというのは、職員が成長するという意味でも、非常にありがたいテーマを今まさにいただいております、ちょっと頑張れば、もうちょっと頑張ればいいところにいきそうなところまで来ておりますので、ぜひ皆さん、引き続きご協力をお願いしたいと思います。

それから、もう1点、私はここに赴任して来る前にソーシャルデザインセンターのことがありましたので、市民の皆さんと検討する中で、宮前区の中のいろいろな市民活動ってこんなにあるよねということ全部洗い出して、一覧にする作業をしたことがあったということで、こういうふうに資料がまとまっていますと来たときにもらったんですけど、そこに載っていない団体さんとか、いろいろな活動をされている方がタウンニュースの人物風土記に次々に出てくるみたいなことがあって、私たちは地域の方のこともまだ全然知れていないんだと、そこからのスタートなんだということ、いつもこの人を知っているとか、ちょっとまだお会いしたことがありませんみたいなことをやっていますので、区役所としても、もっともっと、いつも本当にごめんなさい、皆さんには何かといういつもお呼びして、本当にまたかと思われているかもしれないんですけど、私たちはもっともっとそういった広がりをしていかなくはならないということは、常に自覚しておりますので、また皆様方の人脈とか、そういうのもたくさんあると思うので、ぜひ引き続き区役所の職員を育てていただければありがたいです。本当に今日はありがとうございました。

司会：ありがとうございました。では、市長、最後よろしいですか。

市長：ありがとうございました。

再度なんですけど、この公共施設というのは、思った以上に幅が広くて、今チャレンジしているのは学校ですね。校庭もそうですし、特別教室みたいな教室もということで、教室シェアリングをやっているということをやっています。これは、やっぱり今までのルールがある以上、それを少し動かそうとすると、いろいろなところで大変なんです。だけど、それもやっぱりチャレンジしていかないと、本当にもったいないと思っているんです。

公共施設って、市民の財産、共有の財産なので、それをいかにうまく時間的にシェアできるかとか、空間的にシェアできるかということをもっともっとやると、使えないと思っていたものが使えるようになる。見えていなかったものが見えてくるようになるという、新しい出会いがあるというふうな、そういうプラスにいかようにも使えるというふうに思っているんで、ぜひいろんな苦労があるとは思いますが、まずやってみよう、駄目だったら元に戻ってもう1回やろうという、そういうチャレンジ精神を持って、これからも取り組んでいきたいと思っておりますので、皆様のご理解とご協力をいただければと思っています。本当に今日はありがとうございました。

司会：福田市長、ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、第58回車座集会を終了いたします。

本日は、ご参加いただき、誠にありがとうございました。